熊野原（くまのばる）遺跡C地区

調査期間：昭和58年4月～59年3月（1983～84）
調査面積：約12000㎡
立地：熊野台地に刻まれた谷に面した台地上
大学内の位置：運動場周辺一帯

調査風景（1983）

発見された遺構
- 縄文時代/早期のキャンプ地（B.C.8000前頃）
- 古墳時代/前期の集落（3世紀）
- 中世/集落（鎌倉～室町時代）

展示資料：古墳時代集落関連遺物

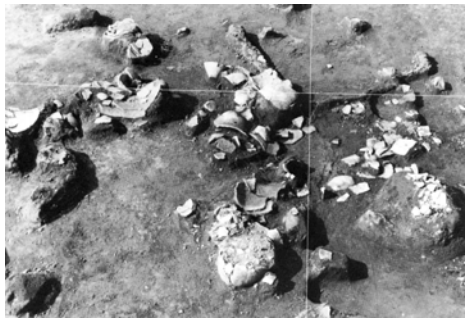
■古墳時代集落の概要

およそ10000㎡の範囲に23棟の竪穴住居跡が密集する。3世紀中頃～3世紀末葉の約半世紀あまり継続したらしい。竪穴住居跡は床面積が15～20㎡の小型のもの、30～40㎡の中型のもの、50㎡以上の大型のものに分かれる。竪穴住居跡のうち4棟前後は火災で焼失している。主柱は2もしくは4本、床に地床炉を持つものと持たないものがある。

住居の方向を揃えた3～4棟前後で一つの屋敷地を構成したとみられる。竪穴住居跡の方向や大小規模の組合せから、そうした屋敷地が5ないし6ほど復原される。同時に存在した屋敷地は2ないし3で、一時期に使用された竪穴住居は10棟前後であろう。

出土遺物のほとんどは、日常生活で使用された土器である（甕・壺・高杯・器台・小型丸底壷）。そのほかに鉄製の鏃や斧・刀子のほか、弥生時代の伝統を引く石製穂積み具（石包丁）もある。土器は現地製のものが圧倒的に多いが、山陰や瀬戸内地方からの搬入品や、グリーンタフ製の管玉も出土するなど、優位な居住層が想定される。

7号住居跡


8号住居跡遺物出土状態

各種の土師器

石包丁

砥石

管玉

■展示遺物

●土師器：古墳時代の素焼き土器の総称。

甕：煮沸用）・高杯（盛り付け用）・器台（丸底土器の受け台）・鉢（銘々器）などがある。

●石器

- 石包丁：左右の両端に刻みを加えたもの（下部が刃）
- 砥石：さまざまな鉄製品を研いだのであろう
- 管玉：グリーンタフ製。首飾りに使われた。